

註14 長沢宏昌「有孔鐔付土器の研究」『長野県考古学会誌』35 1980年

註15 長沢宏昌「有孔鐔付土器とその用途実験」『甲斐路』52 1984年

註16 小河邦男『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書II』 茨城県教育財団 1981年

(4) 器台形土器について

縄文時代中期に特徴的にみられる一器種として器台形土器・台形土器・器台などと呼称されている土器が存在する。当遺跡においても破片を含めて4点の器台形土器が出土している。中でも6区の第46号住居跡出土の土器は、脚部全面に縄文が施文されている特異なものである。

器台形土器について正面から取り組んで論じたものとしては、室伏徹氏と上川名昭氏の⁽¹⁾論攷がある。他は報告書、あるいは概説書などで簡単に触れているものがみられる程度である。

そこで、本稿では室伏氏の説に従って、茨城県内を中心に若干の資料集成を行い、時期的変遷などについて記述してみたい。

器台形土器の名称について室伏徹氏は、弥生時代の以後の器台との混同を避けるために台形土器と呼んでいるが、器台形土器と称すれば、一応区別がつけられるものと考え、本稿では器台形土器と呼称した。

形態分類および各部の名称についても室伏氏は、A型（無脚のもの）・B型（有^{ゆうがく}鐔のもの）・C型（無鐔のもの）に分類している。A型は、山梨県坂井遺跡・桂野遺跡などで見られるだけで出土例も少なく、室伏氏のいわれるようにB型の形態変化のひとつとして位置づけられる可能性が高い。茨城においてはA型の分布はなく、B型・C型の分布がみられる。

茨城県内出土の器台形土器は、次のとおりである。当遺跡6・7区出土例以外の図・番号は報告書所収の番号である。右端の図・番号は、挿図（第660図）の番号である。

1 南三島遺跡	（竜ヶ崎市）	2 区第26号住居跡出土例（第250図 ⁽²⁾ 2）	第660図10
2	〃	6 区第46号住居跡出土例（第109図2）	
3	〃	6 区第55号住居跡出土例（第148図12）	
4	〃	6 区第281号土壌出土例（第267図17）	
5	〃	7 区第28号住居跡出土例（第475図3）	
6 赤松遺跡	（竜ヶ崎市）	第4号住居跡出土例（第90図 ⁽³⁾ 4）	
7	〃	第25号住居跡出土例（第138図14）	
8	〃	第34号住居跡出土例（第152図23）	
9	〃	第36号住居跡出土例（第163図17）	
10	〃	第38号住居跡出土例（第165図6）	
11	〃	第179A号土壌出土例（第190図5）	

12	〃	第206号土壙出土例（第192図12）	
13	下広岡遺跡（桜村）	第39号住居跡出土例（第132図31） ⁽⁴⁾	第660図 2
14	〃	第113号土壙出土例（第141図97）	第660図 5
15	〃	第424号土壙出土例（第155図182）	第660図 4
16	〃	D3b ₄ グリッド出土例（第161図225）	第660図 1
17	大谷津B遺跡（谷和原村）	第36号住居跡出土例（第138図1） ⁽⁵⁾	第660図 9
18	筒戸A・B遺跡（谷和原村）	第13号住居跡出土例（第172図1） ⁽⁶⁾	第660図 8
19	〃	第42号住居跡出土例（第188図26）	
20	〃	第418号土壙出土例（第205図14）	
21	〃	グリッド出土例（第206図3・4）	
22	砂川遺跡（水戸市）	第18号住居跡出土例（第15図1） ⁽⁷⁾	第660図 7
23	塙東遺跡（水戸市）	I c ピット内出土例（図版X—1） ⁽⁸⁾	第660図 3
24	君ヶ台遺跡（勝田市）	（第71図7） ⁽⁹⁾	第660図 6

茨城県内の器台形土器の出土例は、以上の8遺跡24例である。この中には小破片も含まれており、ほぼ器形をうかがえるのは、1・2・13～18・22・23・24の11点で半数以下にすぎない。1は、脚部がやや内湾し無文で8個の孔を有し、受け面は平坦に作出されている。伴出土器からみて加曽利EⅢ式期のものと思われる。2は、前記のように脚部全面に大粒の単節縄文が施されているもので、受け面は平坦である。受け面直下に1条の凹線が巡る特色がみられる。伴出土器からみて、加曽利EⅣ式期の古い段階のものかと考えられる。4は断片であるが、2条のための沈線が脚部の上端から垂下している点に特徴がみられる。6～12の赤松遺跡出土資料はいずれも破片であるが、伴出土器からみて加曽利EⅠ式期の新しい段階からEⅡ式期にかけての時期のものと判断される。13は有鐙のもので、孔は2個1対のようであるが単位数は不明である。無文で、受け面は平坦と考えられる。伴出土器には阿玉式土器・勝坂式土器・加曽利EⅠ式土器などが混在していて詳しい時期は不明である。14は脚部全面に縄文が施文されているもので、楕円形の孔が4個認められる。受け面は平坦である。伴出土器は図示されていないが加曽利E式期のものと考えられる。15は無文で、脚部に楕円形の孔が4個穿たれている。受け面の端部および脚端部が若干そりかえる特色が認められる。2次加熱を受けている。16は無文の有鐙のもので、脚端部が反っている。脚部に2個1対の孔が認められるが単位数は不明である。15・16ともに伴出土器からの時期比定はできない。17は、無文のもので脚部は直線的に外方へ開いている。孔は8個あり、受け面は凹レンズ状にわずかに凹んでいる。伴出土器からみると、加曽利EⅢ～Ⅳ式期にかけてのものと思われる。18は、17に類似する形状を呈しているが、脚端部が内湾する点で少し異なっている。全体の孔の数や配列は不明である。伴出土器は図示されていないが、同一個体の破片が

出土した第63号住居跡からの出土土器からみると加曾利EⅢ式期のものと考えられる。22は、無文で脚部はほぼ直立気味に開くもので、受け面がわずかに凹んでいる。孔は5個である。伴出土器からみて加曾利EⅢ～Ⅳ式期にかけてのものと推定される。23は、有鐳のもので、無文で現存部（約3分の1）には孔の存在が確認できない。受け面は平坦で、炭化物の付着が認められている。脚部には赤彩痕が残されている。伴出土器は、大木8a式の新しい段階か8b式期のものと思われる。本器台もこの時期のものと考えられる。24は、出土状況が不明のため時期不明であるが、後記するCⅡ形の完形品である。孔は6か所以上と思われる。

次に、県内出土の主な器台形土器についての形態および諸特徴についてまとめてみる。

まず、全体の形態を見ると、B型に属するものが13・16・23の3例で、C型の例が1・2・14・15・17・18・22・24である。詳しく分類すると13はBⅢ型、23はBⅡ型と考えられるが、16は短脚で室伏氏のB型の分類には含まれないものである。C型については坂井遺跡の出土例が3点と少ないために細分類をしていないが、脚部の形状の差異に視点をおいて分類すれば、脚部が底面に向かうに従って狭くなる閉脚型、脚部が底面に向かうに従って広がる開脚型、およびほぼ直立する型（室伏氏のいう太鼓胴の脚部をもつものを含む）に大別できる。それぞれをCⅠ、CⅡ、CⅢ型とすれば、1・2・14・15・17・18・24はCⅡ型、22はCⅢ型とすることができる。CⅡ型の中にも17・18のように受け面近くはほぼ直立し、以下直線的に開くものと、15のように外湾気味に開くもの、2のように直線的に開くもの、1・14のように内湾気味に開くものがあり、細別できる可能性がある。

脚部の施文については、無文のものが圧倒的多数を占めるが、有文のものも存在する。施文のあり方は外面に施すもの、内外面に施すもの、内面に施すものの3種が考えられるが、内外面に施文された資料はごく少ないものと思われる。⁽¹⁰⁾外面に施す文様には沈線による施文だけによるものが多いが、刺突文・爪形文・三叉文^{さんさ}など特徴的な文様を施すものも認められる。内面に施文する器台形土器の類例も増加しつつある。南三島遺跡6区第46号住居跡の縄文施文の器台形土器2⁽¹¹⁾の類例については、県内では14の下広岡遺跡出土例、県外では岩手県盛岡市繫遺跡出土例・宮城県白石市菅生田遺跡出土例⁽¹²⁾・長野県塩尻市平出遺跡ト号住居跡出土例⁽¹³⁾があげられる。このうち、後2者は無孔の例で、その他は有孔のものである。菅生田遺跡の例は後期前葉まで降と考えられている資料である。

孔の数および配置形式については、室伏氏が1孔単位で4・5・6・7孔のもの、2孔単位で2対（4）、3対（6）、4対（8）のものに分類されているが、今回県内の出土資料を調べてみた結果、1孔単位で8孔のものと考えられる例が認められた。南三島遺跡2区出土例および大谷津B遺跡出土例である。

その他の注意すべき点としては、埴東遺跡出土例において観察されている受け面における炭化

物の付着と脚部に赤彩痕が存したことである。前者については、関連する資料として神奈川県相模原市橋本遺跡 2 区の第 1 号住居跡出土の 2 点の器台形土器の受け面上に炭化した網代の繊維が⁽¹⁴⁾付着していた事例が報告されており、器台形土器の用途解明に役立つものとして注目すべきものである。赤彩痕については、報告例を知らないが、今後の調査・報告において留意する必要があるだろう。

次に用途については、一般的な「土器をのせるための土器」としての用途と八幡一郎氏が提起された「土器を作るための土器」としての用途の 2 説などがある。⁽¹⁵⁾室伏氏は八幡氏の考えを発展させ、回転台とする着想から土器施文における文様帯の縦位方向への分割に役立つ「ある種の分度器のような役割」を果す器具として器台形土器の用途を考えようと試みた。この考え方は、室伏氏の指摘するように、土器の文様単位数と器台形土器の孔の配置型式との対比が数多くおこなわれなければ立証の困難な事柄であるが、十分に検討すべき価値のある意見と考えられる。あらためて室伏氏の見解に注目した次第である。但し、無孔の器台形土器については問題が残る。

最後に、器台形土器の変遷について考えてみると、初現期については中期前半と考えられる。現在公表されている資料の中では、東京都八王子市神谷原遺跡 SB11 号住居跡出土の例、⁽¹⁶⁾町田市武蔵岡遺跡 3 F-10 号住居跡出土の土器などが初現期のものと考えられる。前者は無文、後者は有文であるが、共に C 型で脚部が底部に向って狭くなる閉脚型（筆者分類の C I 型）に属する。このタイプが古かるべきことについては室伏氏も記しておられる。C I 型が現状ではほぼ初現期の形態と考えられるが、今後の資料の増加によっては変更がなされるかもしれない。⁽¹⁸⁾その他の C II・III 型の各種や B I～III 型の変遷過程については、検討不十分なために省略する。

一方、終末期ないし下限の問題については、前記の宮城県菅生田遺跡の例、および千葉県成田市桜谷津遺跡 1 号住居跡出土の例から、⁽¹⁹⁾後期前葉まで降るものと考えられる。前者は縄文施文、後者は無文で共に無孔である。桜谷津遺跡例は堀之内 I 式期の住居跡の床面直下の出土である。器台形土器は終末には無孔のもののみになってしまうのか、あるいは最後まで有孔の例が存在するのかは明らかではない。なお、両者ともにわずかに鏢状の形態を残す開脚型である。

以上、冗長に器台形土器について記してきたが、不十分なものである。同学諸兄のご批判、ご教示をたまわれれば幸いである。

註 1 a 室伏徹「台形土器について——坂井遺跡出土例を中心として——」『丘陵』1-2 号 1976 年

b 上川名昭「器台形土器」『中期縄文文化論』奈良明新社 1978 年

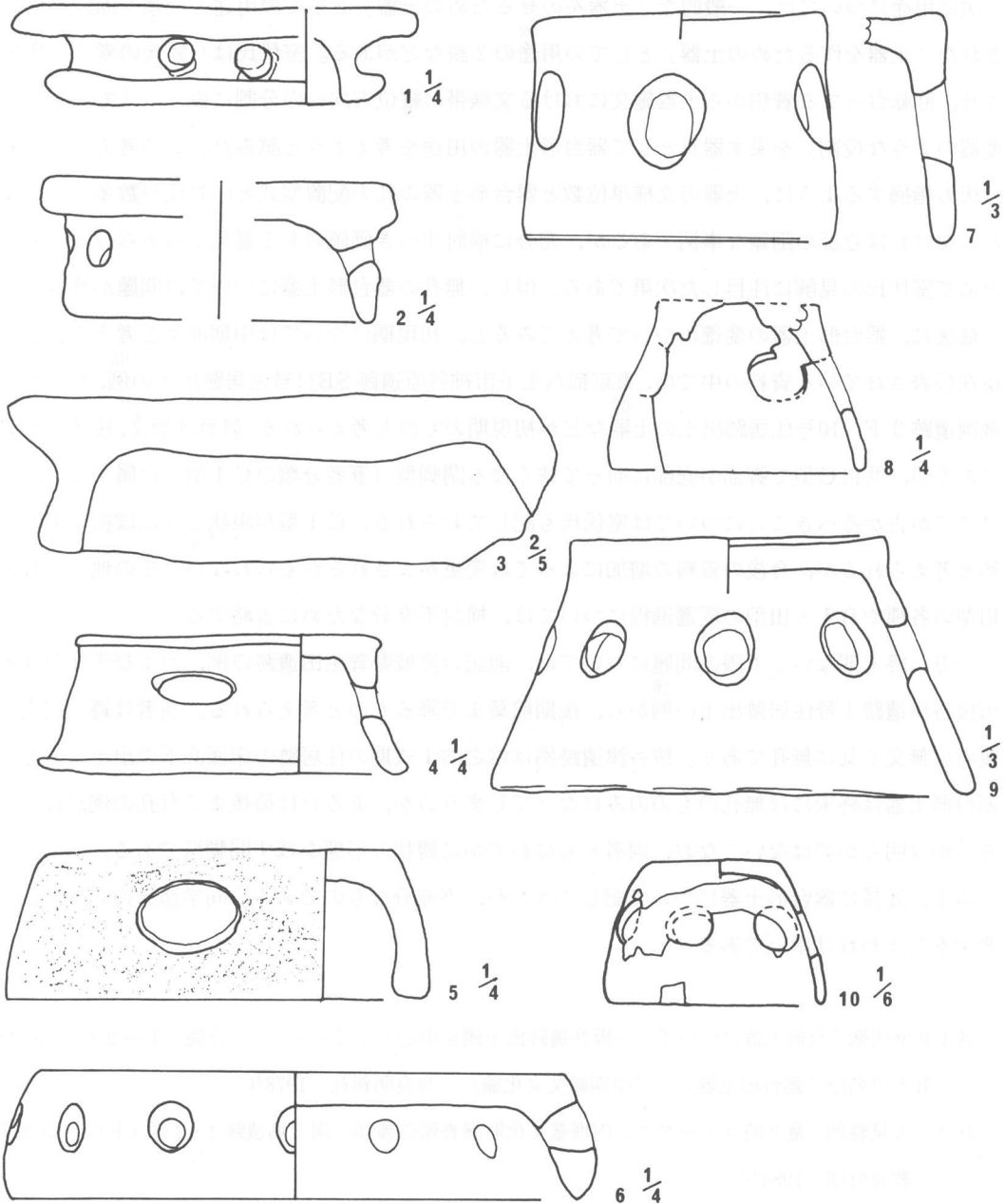
註 2 人見暁朗『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 10 南三島遺跡 1・2 区（下）』茨城県教育財団 1984 年

註 3 川井正一『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 4 赤松遺跡』茨城県教育財団 1980 年

註4 小河邦男『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書II』 茨城県教育財団 1981年

註5 中村幸雄『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 大谷津B遺跡』 茨城県教育財団 1983年

註6 佐藤正好『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 筒戸A遺跡 筒戸B遺跡——遺構・遺物編（上）——』 茨城県教育財団 1984年



第660図 茨城県内出土器台形土器

- 註7 渡辺俊夫『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4 砂川遺跡』 茨城県教育財団 1982年
- 註8 中村光一他『塙東遺跡』 茨城高等学校史学部 1978年
- 註9 川崎純徳「君ヶ台貝塚」 『勝田市史 考古資料編』 1979年
- 註10 福島県袋原遺跡例などが代表的なものと思われる。
- 註11 草間俊一他『岩手県盛岡市繋遺跡』 盛岡市公民館 1960年
- 註12 丹羽茂他「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告VII』 宮城県教育委員会 1982年
- 註13 永峯光一他『平出』 朝日新聞社 1955年
- 註14 土井永好他『橋本遺跡——昭和55年度調査概要——』 相模原市橋本遺跡調査会 1981年
- 註15 八幡一郎「縄文土器・土偶」 『陶器全集』29 平凡社 1965年
- 註16 中西充他『神谷原II』 八王子市櫛田遺跡調査会 1982年
- 註17 折原洋一他『東京都町田市武蔵岡遺跡——1979年度調査——』 武蔵岡遺跡調査会 1980年
- 註18 最近、山梨県勝沼町宮の上遺跡で、中期初頭の器台形土器の出土があった由情報を得ているが、未報告のためにこれ以上はふれないで置く。
- 註19 田川良『桜谷津』 桜谷津遺跡発掘調査団 1977年

(5) 台付土器について

当遺跡からは台部を有する土器が6区で18点、7区で4点出土している。当遺跡から出土した例はいずれも台部だけかまたはその接合部の破片で、器形をうかがえるようなものは出土していない。

台付土器は、縄文時代前期にも散発的な出土例がみられるが、本格的に盛行するのは中期からと考えられる。中期も初頭から前半に属する出土例は少なく、中葉以後、後半にかけて盛行するものである。関東・中部・北陸・東北地方など広い分布域を示しているが、未だ縄文中期の台付土器については本格的に研究された例は少ない。藤森栄一氏が『井戸尻』の報告書中で、「新道期に確立し、井戸尻期で最も発達した」とし、用途は「特殊な供献具」であろうとした以外には、山崎和巳氏の形態分類と若干の集成をあげうただけである。⁽¹⁾この中で山崎氏は、台付土器を2形式に分類した。胴中部付近で膨らみ、そこに最大径があり球状を呈する(A形式)、口縁部付近に最大径を有し、胴部は膨らみをみずにやや直線的に窄まる⁽²⁾(B形式)の2形式で、A形式を8例、B形式を4例集成している。A形式は長野県4例・東京都3例・埼玉県1例で、B形式はいずれも長野県の例となっている。12例の時期を調べて、山崎氏は台付土器は、新道式期から曾利V式期まで存続すると指摘している。

筆者も、手元の若干の文献によって台付土器の集成を行ってみたところ、西は九州熊本県黒橋